
十人十色

北川瑞稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十人十色

【Nコード】

N0880N

【作者名】

北川瑞稀

【あらすじ】

「私が出来ること。私にしか出来ない事。」
高3、進路に悩むお年頃。
サイトからの再掲載です

十人十色。百人百色。千人千色。
人には色々個性や特技があるけれど、私には何がある？

「私の特技って、何かな…。」
「やっぱり空手だろ」

今一番答えが欲しい問い。だけど答えが返ってくるとは思っていなかったの、返ってきたことにはびっくりした。

「…新一、本読んでたんじゃないの？」
「今も読んでる。けど、蘭が話してることは聞いてるよ」

視線は手元の本のまま言われたって、あまり説得力がないわよ。
それに本を読みながら話を聞くなんて器用なこと、できないくせに。
不器用な君の名誉のために、言わないであげるけど。

「そついうのじゃなくて、何ていうか…生活面で生かせるようなこと
とで」

「家事全般できるじゃねえか」
「…新一は、料理できないもんね」

「うるせえよ」

少し苛ついた声。それでも、気にせずに続ける。

「でもそれは誰でも出来ることでしょ？」

「…悪かったな、人並みのことができなくて！」

「そういう意味で言ったんじゃないわよ。そういうのじゃなくて…
何ていうか…」

「あー…成程。進路か。」

「…よくお分かりで」

悔しいけれど頷くしかない。いとも簡単に私の問おうとしていることがわかってしまった当の新一は、ひょうひょうと本を読んでいる。その姿に、敗北感を味わってしまうのは何故だろう。

彼は卑怯だ。彼、というか…“探偵”はみんな卑怯。大抵のことは何でもわかってしまうから。

前に、7人の探偵が集められた邂逅に、父が呼ばれたことがあった。勿論自分や、その頃はコナンの姿だった彼も付いていたのだが、その探偵らの推理力が凡人よりも何倍も並外れていて、ものすごく驚いた。

——何でも、わかつちゃう。自分のこと以外は。

そんな不器用な探偵が、愛しくて。ずっと一緒に居たいと、思っているのに。

「…新一は、どこの大学行くとか…決めた？」

「え？あー…まあ…」

「どこ？」

「…とりあえず、帝都大かなって」

やっぱり、新一はそうだよな。

予想していた答えだったが、少しがっかりした。

「蘭は？」

「え？」

「オメーは、どこに行くか決めたのか？」

「…まだ決めてないから、悩んでるんじゃない」

「まあ…そうだよな」

訊かなくてもわかってるくせに。

私が、何を思っているかなんて、訊かなくてもわかってるくせに。

——ずるい。新一は、ずるいよ。

ポロポロと涙をこぼす私を見て、彼は慌てる。なかなか泣き止まない私に、新一は困った様子だ。

ごめんね、ごめんねと謝ろうとしても、口から出るのはしゃっくりと嗚咽だけで、さらに悔しくなって泣いて、その繰り返し。

——本当にずるいのは、私。

彼を、本当はもっと、遠くへ飛び立てるはずの彼を、泣いて困らせて、縛り付けて。

自己嫌悪。こんな自分なんて嫌いキライきらい。ごめんね、新一。

しばらくして、彼は口を開いた。

「蘭は、やりたいことがあるのか？」

「え…？」

「やりたいことがあるのなら、それに向かってったほうがいいと思う。例え、誰も知り合いが…オレや園子が、居なくても。」
「っ…」

ちゃんと知ってたんだ。私は何を悩んでいたのか。
優しい声に、優しい瞳に、泣きそうになる。

「だから、蘭が待っててくれたみたいに、オレも待つから」

欲しかったのは、その言葉。

“待つてるから”

たったその一言で、勇気を貰える。

「ゆつくり選んでろよ。オレは蘭の隣に居るから」
「うん…」

あの時のツケを今返してやるってくらい、待たせてやろうか。なんて意地悪な考えが頭をよぎる。まあ、それもいいかもしれない。私も新一もこれまでずっと、早く進みすぎたのだから。

「…あ、一つあった」

「何が？」

「蘭にしか、できないこと」

「…え？」

何のことだかよくわからないまま茫然としてみると、彼はくすりと笑った。

やっぱり、ずるい。新一はずるいよ。

ふくれる私の額に、彼は口付けを落とす。

それで誤魔化そうとするのも、やっぱりずるい。彼の思惑に引がかかってしまう自分も、やっぱりずるい。

「…分からない？」

「分からない」

彼はしょうがないなあ、とでもいうようにため息をつく、私の耳元で囁いた。

「

」

その科白^{セリフ}がキザすぎて、だけど彼らしくて、私は声をあげて笑ってしまった。

誰かに支えられずに生きて行くことは不可能だし、誰にも関わらずに生きて行くことも不可能だ。

だから、誰かと共に。私はたまたま新一だけど。自分の色を、探す為に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0880n/>

十人十色

2011年10月6日08時13分発行